

中大生の旅するチカラ

11

◇東日本大震災を乗り越えて

観光のチカラで復興応援を(みやぎ三陸編)◇

観光まちづくりの担い手と

南三陸町への奇縁の旅

列島が寒波に見舞われた2月下旬のこと、仙台駅を降り立つと改札に、笑顔で出迎える一人の男性がいた。志賀秀一さん——。東北地域環境研究室の代表で、観光まちづくりの第一人者だ。今回、志賀さんの導きで、南三陸町(宮城)を震災後、初めて視察することになった。「南三陸町ブランド塾」が創設されたのは6年前のこと。その塾長として、町民が一丸となった町の魅力発信のための取り組みに注力した。

その南三陸町も東日本大震災で壊滅的な被害を受けた。震災前でも人口1万6千人という小さな町だが、うち2千人もの減少に見舞われた。その約半数が命を落とし、半数が町を離れたと聞く。

マスコミでもたびたび報道された防災対策庁舎も、骨組みを残すだけで、近く取り壊されることが決定したという。震災の爪痕をモニュメントとして残す構想もあったが、被災された住民の感情は複雑だ。これからの復興まちづくり、培った観光ブランドをどのように活かしていけばよいか、そうした話が車中で交わされた。

仙台の沿岸部を貫く東部道路をひた走るなか、志賀さんのこれまでの業績などに話が及んだ。現・日本政策投資銀行のご出身ということは知ってはいしたが、観光・まちづくりのシンクタンクを立ち上げたのは10年前のこと。今こそ観光は、お国の光を観る・魅せる。未来産業として、国や自治体も一生懸命だ。しかしそれも、観光立国推



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大・城西国際大・横浜商科大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。日本旅行作家協会、日本観光研究会等所属。著書に「JTB旅をみがく現場力」(東洋経済新報社)など。近著に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)がある。



南三陸の人たちと交流をはかる東北地域環境研究室の志賀秀一氏(右)

進基本法が施行(2007年)されて以降のことである。金融の世界から観光分野に転じた当時は、周囲も賛否さまざまだったらしい。自分が似かよったプロフィールを持つだけに、志賀さんの話に身をつまされた。



志津川中学から望む南三陸町。東日本大震災で町の様子は一変した

さらに渡された経歴書に目をやると、驚いたことに中央大学経済学部出身とある。それから車中は騒然となった。東北被災地の観光復興に熱意をもった「同志」というだけでなく、同窓の、同じ経済学部出身の大先輩に、ご案内いただく奇縁の旅の始まりだった。

域外交流がもたらした多額義援金 「地域づくり総務大臣表彰」大賞受賞

なけなしの財布から、それでも義援金を投じた学生もいただろう。東日本大震災は、多くの人の心を「今、自分にできること」へと向かわせた。

被災3県の市町村へ直接寄せられた義援金額は、仙台市が最多で9億円に達したが、なかには1千万円にも届かない自治体もある。ところが南三陸町へは6億円を超える義援金が届けられ、ふるさと納税では特に群を抜く。人口の多寡に関係なく、これだけ多くの支援の手が差しのべられたのは、域外との交流の素地なくしてはありえない。観光と水産業を軸にした人的ネットワークの構築が、震災前からさかに行われてきたことを裏づける。

志賀さんに連れられて真っ先に向かったのが、仮設商店街「南三陸さんさん商店街（南三陸志津川復興名店街）」だ。震災から50日目、地元商店主や全国の有志たちが出店者となって月1回の「復興市」をスタートした。これまでに10回開催されたが、いずれも盛況で、1日2万人を越す来場もあったという。その復興市が弾みとなって、仮設の商店街が賑々しくオープンした。

それが、とにかく活気に溢れていて誰もが笑顔だ。「こうでなく、なちゃ」。そう語る



「復興市」の頑張りが「南三陸さんさん商店街」の賑わいへとつながった（開業翌日の2012年2月26日撮影）

山内正文さんは、復興市の実施を呼びかけ実行委員長を務めた。もとは志津川おさかな通りに店を構えていたが、津波で流された。避難先の志津川中学校では自治会長としてリーダーシップを發揮した。かねてより観光と水産業の振興に「大漁市」などの誘客イベントを行っていたことから、中学生たちも顔馴染みだ。その山内さんのネットワークが大きく広がり、復興への糧となっている。

こうした地域活動は、行政の後押しなしには成し得ない。志賀さんにプレハブ店舗の一角へと連れて行かれた私は、佐藤仁・南三陸町長にお会いする機会を得た。事前に、とりはからってくれて



震災前から地域のブランディングに注力した南三陸の佐藤町長

いたのだ。あの防災対策庁舎の屋上のアンテナにしがみつき一命をとりとめ、トップセールスでわが町を積極的に喧伝することでも知られた町長だ。震災後の復興活動には目覚ましいものがあり、南三陸町は平成23年度「地域づくり総務大臣表彰」大賞を受賞した。人が人を呼ぶ南三陸。義援金の多さは、こうした震災前からの地道な努力があったからだとは知らされた。

「南三陸ホテル観洋」の名物女将 学生ボランティアによる寺子屋も

日も暮れるころ、海岸線にせり出すように佇む「南三陸ホテル観洋」にチェックインした。出迎えてくれたのは、名物女将の阿部恵子さんだ。ちなみに、南三陸町における宿泊者数24万人のうち、20万人はホテル観洋の宿泊者（平成21年調査）というから、存在は推してはかるべしだ。

震災時は2階まで浸水したというが、レストラ

ンから順次、営業を再開して、今は被害の痕跡もないほどに復旧した。震災直後は350人も避難者を受け入れ、次いで二次避難所として600人を収容したが、やがて客室に引きこもる避難者のために裁縫教室などのイベントを次々、企画するようになる。なかでも「寺小屋」と名づけた学習塾は、大学生ボランティアの協力を得て行われ、被災した子供たちの学びの場となった。被災者が復興に向けて日中活動しやす

いよう、託児を兼ねて施設の一部を開放している。さらには海外からのボランティアが先生役の英語教室や、パソコン教室も開設した。聞けば女将のご主人である阿部隆二郎副社長も、「南三陸町ブランド塾」の塾生という。志賀さんを「先生」と慕っていたのが印象的だ。客室から見渡す海は、実に穏やかで洋々としている。海に突き出た露天風呂は岸壁の白いしづきも煌めく壮大にある。自然と共生しながらも、遅く生きている南三陸の人たちから、泣き言は聞かなくてこない。

欲しい都市と地方結ぶ人材 被災地と先輩から学ぶ

最終日、私たちは仙台へと戻り、「南三陸町における震災復興・再生に向けた観光振興方策策定調査懇談会」に出席した。町役場でただ一人の観光担当は、「再開復興を旗上げしても人手が足りず、

すぐに進めないもどかしさがある」と受け入れる側の苦しさを吐露した。実際に被災者の負担になるようであつては勇み足も考えものだが、応援者が数多く存在することの表れでもある。

一方、同じ三陸沿岸でも、隣県・岩手と宮城とでは状況は大きく異なる。つい1週間前に訪ねた岩手県内の仮設商店には、人影もまばらだった。私は子供のころ、父の生家がある陸前高田へ車で訪ねる道すがら、ときおり南三陸町から気仙沼を抜けて行ったことを思い出した。これからは県境や行政の枠を超えた広域観光としての新たなルートづくりが急務であろう。

帰京してすぐ、志賀さんから手紙が届いた。末筆には「南三陸町のことをよろしく願っています」とある。北海道で生まれ、東京・駿河台の白門で学び、今は仙台で暮らす志賀さんが、応援する町・南三陸。こうした域外の心ある人たちに支えられ、被災地におけるツーリズムは類なき輝きを放っている。そして、普段からの観光促進と地域ブランド力をつけることが、いかに重要であるかを知らされた。さらに志賀さんのような、都市と地方との接点的な人材の必要性を感じた。特に災害時にあつては大きな役割を果たす。

学生ボランティアはもちろんだが、卒業論文の踏査やゼミ合宿など機会をみて、ぜひ一度、三陸沿岸を訪ね歩いてみてほしい。被災地に学ぶことは大きい。それは先輩からの学びにも似て、厳しいながらも温かいのである。